

平成26年度

事業活動報告書



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

I. 法人の概要

(平成27年3月31日現在)

法人の名称	公益財団法人吉野川紀の川源流物語
設立年月日	平成14年4月1日 平成24年4月1日名称変更し、移行したことにより設立
定款に定める目的	この法人は、「樹と水と人の共生」を目指し、吉野川・紀の川の源流部を拠点に、その自然的価値、文化的価値を大切に、流域をはじめ都市部の人々にこれを伝え、共に考え、行動するため、体験学習・交流活動を通じて、広く啓発や環境教育に関する事業を行う。そして、これに必要なとなる拠点施設や関連公共施設の維持管理・運営に関する事業を行い、源流域の自然環境保全活動に努める。これらの活動により、流域をはじめ都市部の人々と水源地域を結び、もってそれらの人々の公共利益に寄与することを目的とする。
定款に定める事業内容	この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。 (1) 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業 ① 「吉野川源流－水源地の森」体験学習プログラムの提供 ② 森づくり体験学習プログラムの提供 ③ 体験学習を通じた環境教育の実施及び支援 ④ 水源地域の環境保全にかかわる人材の育成 (2) 流域交流・啓発にかかわる事業 ① 水源地域の自然及び文化を介した交流行事の実施 ② 水源地域の環境保全の普及啓発のための行事等の開催、印刷物等の刊行、電子情報媒体の作成 (3) 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業 ① 水源地域及び流域における参加型観察調査会の実施 ② 「吉野川源流－水源地の森」自然実態調査の実施 ③ 源流部における斜面崩壊地での対策実験及び経過観察の実施 (4) 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業 ① 展示を通じて情報発信を行う施設の管理・運営 ② 源流部での体験活動の拠点となる森とこれに附帯する施設の管理 (5) 学習教材や、啓発関連物品等の販売 (6) 他団体からの依頼にもとづいてこの法人が構築する情報や技術によって対応可能な業務の受託 (7) その他この法人の目的を達成するために必要な事業 2 前項第1号から第4号までの事業は、公益目的事業とし、奈良県内で行う。
主たる事務所	〒639-3553 奈良県吉野郡川上村大字迫 590 番地の 2

<p>役員等</p>	<p>評議員（五十音順）</p> <p>井上 正崇（大阪工業大学学長） 上嶋 教孝（川上村教育委員会次長） 浦西 勉（龍谷大学教授 元奈良県教育委員会） 大倉 一郎（橋本市上下水道部長） 久保田 幸治（奈良県水道局長） 霜上 民生（一般社団法人近畿建設協会理事長） 富松 淳（和歌山市水道局長） 中平 繁和（川上村議会総務文教委員長） 野村 政樹（奈良県地域振興部長） 原見 仁志（和歌山県企画部地域振興局地域政策課長） 春増 薫（川上村議会議長） 森内 太（川上村地域振興課長）</p> <p>理事（代表理事・業務執行理事を除き五十音順）</p> <p>栗山 忠昭 代表理事・理事長（川上村長） 松村 悦治 代表理事・副理事長（川上村副村長） 森脇 深 業務執行理事（川上村水源地課長） 辻谷 達雄（元 森と水の源流館館長） 西久保 智美（コミュニティーライター） 橋本 裕行（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館学芸課長） 畑田 道矢（奈良県地域振興部地域政策課長） 宮口 侗廸（早稲田大学教授） 横田 岳人（龍谷大学准教授）</p> <p>監事（五十音順）</p> <p>辰巳 八郎（川上村監査委員） 中島 誠（税理士）</p>
<p>主な会議</p>	<p>定例理事会 6月 4日（前年度事業報告及び決算の件ほか） 3月 23日（次年度事業計画及び収支予算書の件ほか）</p> <p>臨時理事会 6月 20日（代表理事・業務執行理事選定の件）</p> <p>定時評議員会 6月 20日（評議員選任の件、理事の選任の件 前年度事業報告及び計算書類等の承認）</p>

II. 事業の状況

公益事業Ⅰ	環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業			
吉野川・紀の川の源流及び水源地域の自然環境や文化を資源とした環境学習及び体験等のプログラム実施を通じて、環境保全や保護についてともに考え、行動するきっかけを提供する。そして流域をはじめ都市部の人々と水源地域の交流を促進し、これらの地域の環境に対する意識の向上ならびに環境保全に寄与する事業。				
	時期	回数	参加数等	概要
水源地の森ツアー（一般公募型）	4・7・11月	3回	61名	「水源地の森」を案内
団体（企業含む）研修等での利用	通年	74件	2,459名	水源地の森散策や森づくり体験など
環境教育支援（学校対応）	通年	98件	4,898名	小学校から大学までの見学案内及び出張源流教室
源流人会等の活動（森づくりなど）	6・8月	2回	12名	一旦伐採された二次林での森林整理作業、「源流学」実技体験 山小屋泊指導者養成講座を1回開催

公益事業Ⅱ	流域交流・啓発にかかわる事業			
吉野川・紀の川流域をはじめ都市部の人々と相互に交流することによって、源流及び水源地域の自然環境や文化的価値を見出し、大切に守り育てていくことを目的とした啓発イベントや講座を実施する。そして自然環境について高い意識をもった人材育成につなげることで、これらの地域環境保全ならびに向上に寄与する。				
	時期	回数	参加数等	概要
第5回全国源流サミット in 奈良県川上村	9月5～7日	1回	500名	実行委員会として企画・運営を支援
一般社団法人近畿建設協会支援 『思いをつなぐ川』吉野川紀の川流域人絵図作成配布	9月	1回	500部	これまでの流域交流の成果を冊子にまとめ上記サミットで配布
源流のつどい	4・6・1月	3回	97名	「山の桜を愛でる」「ホタルの夕べ」 「氷瀑ツアー」
夏休み（館内）プログラム	7～8月	5種	90名	丸太切り体験、学習シートほか
流域等各地へのPRキャラバン	通年	11回	400名	第34回全国豊かな海づくり大会特 ラバ会出展ほか
川上村環境基本計画推進業務	通年	7回	120名	住民参加による環境クラブ活動と 役場公共施設職員研修の企画・実施
機関誌『ぼたり』発行	7・12・3月	3回	-	源流人会会員、村内観光施設、国会 図書館、村内図書館ほかPR用配布
河川功労者表彰 （公益社団法人日本河川協会）	5月26日	1回	-	環境学習や体験プログラムの提供、 流域交流などの活動を評価
第34回ダム建設功績者表彰 （一般財団法人日本ダム協会）	11月28日	1回	-	ダム等の周辺環境保全整備に著し く功績のあった団体として評価

公益事業Ⅲ	源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業			
吉野川・紀の川流域の源流部における自然的価値及び文化的価値を大切にするため、流域をはじめ都市部の人々にも参加を求めながら調査・研究を行い、その成果の発信を行うことを通じて、これらの地域の環境保全ならびに向上に寄与する。				
	時期	回数	参加数等	概要
吉野川紀の川しらべ隊	5・8・9月	5回	151名	参加体験型でのコケ、水生生物・野草などの観察
いろりばた教室	3月	1回	7名	柏木地区の鱧乳洞と町並み見学 ※8月「魚とり」は台風の為に中止
水源地の森自然環境調査	4・5・7月	2回	4名	植生調査とこれまでの調査取りまとめ
専門家による調査・研究	6・7・9・10・11月	8回	54名	植物（下層植生・トケヅラ・魚類・菌類・シジミ類など研究者の調査支援

公益事業Ⅳ	拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業			
水源地域における環境保全の啓発や環境教育を行う拠点となる施設やフィールドを一体的に維持管理及び運営を行うことで、地域環境保全ならびに向上に寄与する。				
	時期	回数	参加数等	概要
「森と水の源流館」管理	通年	—	利用者 12,320名	日常の維持・管理、運営。定期点検、清掃、補修、企画展「冬虫夏草アート展」等
「吉野川源流—水源地の森」管理	通年	35回	—	散策路周辺の見回り・点検、補修 (入山者803名)
「水源地の森交流施設」管理	通年	35回	—	水源地の森に付帯する休憩・管理施設の見回り・点検、補修

第34回全国豊かな海づくり大会における協力活動

- ・ 森と水の源流館水槽にて放流アユ（予備用）を待機（11月10日～17日）
- ・ 放流式典来場者への森と水の源流館を開放（11月16日）
- ・ 「水源地の森」紹介映像やプレス取材時のコーディネート
- ・ 森と水の源流館でのキングジョメッセージオブジェ設置とメッセージ募集（2月～11月）
- ・ ほか、警備等全般における協力
- ・ やまと海づくりフェスタ in まほろばキッチンへの出展（11月15日・16日）

年間を通して実施された川上村の関連事業では

- ・ 「水の恵み見届け隊」（村民の流域学習会）3回（6月・9月・10月）の企画実施協力
- ・ 『山に木を植えました』図書ワークショップを川上村立図書館と共催
- ・ 通年で森と水の源流館での学校案内や出張源流教室でも事業趣旨を周知

収益事業Ⅰ	ミュージアムショップ事業
拠点施設において、訪問の記念となる品とともに、源流及び水源地域の支援・PR並びに自然環境の保全・啓発等に寄与する関連商品の販売を行う。	
概要	
オリジナル商品（副読本・絵本・ポストカード・楽曲CD「源流の郷」など）・地域の自然、歴史・文化・伝承の書籍、環境に配慮した製品（洗剤など）、村内で採水・製造のペットボトル入湧水、自然観察用品（ルーペなど）を紹介・販売。	

収益事業Ⅱ	受託事業		
他団体からの依頼にもとづいて当財団が構築する情報や技術によって対応可能な業務を受託し行う。			
	委託者	時期	概要
和歌山市民の森づくり管理業務委託	和歌山市	8～3月	3haの二次林管理作業
和歌山市民の森づくり体験学習業務委託	和歌山市	10月に2回	山の仕事体談会と源流学習会を併催。1回は荒天でプログラムを変更
水のつながりプロジェクト実施等に係る業務	川上村	6月～10月	農作業やトレッキング等源流と平野部の相互交流事業実施支援、報告書作成
啓発用間伐材割箸セット製作	環境保全促進和歌山市懇話会議員連盟	1～3月	間伐材利用促進のメッセージを河口のまちから発信してもらう

公益事業Ⅰ 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業

一般公募や団体の要望により企画する「水源地の森ツアー」のほか、源流地域の自然や文化にふれる体験型ツアー形式などによる研修の受け入れを行った。

【一般公募型 水源地の森ツアー】

4月、7月、11月 に開催し、61名が参加。



【企業や行政など団体による研修等の利用】



奈良県新採用職員研修(奈良県自治研修所 4/10)



森づくり体験(関西電力労働組合 10/17)



水源地の森案内(全国源流サミット 9/5)



源流体験会(吉野川紀の川流域協議会 3/7)

【環境教育支援（学校対応）】

森林環境学習の受入れや「出張源流教室」を実施。



松陰高校 Blue Earth Project (8/7)



桜井市立朝倉小学校出張源流教室 (7/3)

【源流人会の活動】

「源流学の森づくり」では、道直し・鹿よけ柵の設置などを実施。



また、会員に呼びかけ「水源地の森」の保全作業や「源流学の森に泊まる～指導員養成講習」などを実施。



「水源地の森」無断掲示物の撤去作業 (4/8)



「源流学の森に泊まる」(3/21～22)

公益事業Ⅱ 流域交流・啓発にかかわる事業

源流地域の魅力を介して、都市部の人々との交流をはかる催しの開催や、各地に出かけてのPR・普及啓発に取り組んだ。また本年度は、「第5回全国源流サミット」や「第34回全国豊かな海づくり」大会といった全国への発信の機会において役割の一端を担った。

【源流のつどい】

「ホテルのタベ」（左：6/29）、「氷瀑ツアー」（右：1/31）を開催し、地元の人々とも交流。



【夏休み（館内）プログラム】

夏休み期間中「宿題応援！」を掲げ、「牛乳パックのリサイクルはがきづくり」や外部講師の指導によるクラフト指導などの体験プログラムの提供を行った。



【機関誌『ぼたり』発刊】

7月・12月・3月の3回、活動報告や調査結果などを記載し発刊、源流人会会員、村内観光施設、国会図書館、村内図書館ほかへ配布。



【流域連携各地での啓発活動・PRキャラバン】

大和の水がめと奈良県営水道展（左：6/14～15）や大和ハウス工業株式会社感謝祭（右：7/29）など、流域各地や川上村との協働支援団体などの行事に出展。



【川上村環境基本計画推進業務】

重点プロジェクトの促進として、役場・公共施設職員の研修会や、村民を対象とした学習会を開催。和歌山市を訪ねて生活排水対策指導員との交流や企業見学（左）、川上村役場や村内施設職員と和歌山市役所との交流（右）など、本財団のネットワークをいかした内容で企画・運営を行う。



【第5回全国源流サミット in 奈良県川上村】

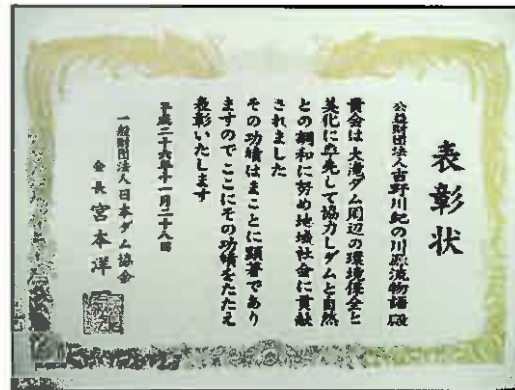
9/5～7 全国源流の郷協議会に加盟の9県19市町村をはじめ近隣市町村、団体、市民500名が参加。本財団は実行委員会として企画・運営に携わった。またこれにあわせて一般社団法人近畿建設協会からの支援を受けて、これまでの流域連携で出会ったキーマンで綴る冊子『思いをつなぐ川～吉野川紀の川流域人絵図』を制作し配布。



【法人の表彰】

主に流域交流・調査・環境学習の活動などが評価され、2団体からの表彰を受けた。

左：公益社団法人日本河川協会「河川功労者表彰」(5月)、右：一般社団法人日本ダム協会「ダム建設功績者表彰」(11月)



【第34回全国豊かな海づくり大会関連での協力】

①



②

④



③



⑤



⑥

- ① 森と水の源流館ディスプレイ
- ② 放流式典来場者への森と水の源流館開放・案内
- ③ 放流アユ(予備用)待機
- ④ やまと海づくりフェスタ in まほろばキッチン出展
- ⑤ 「水の恵み見届け隊」(村民の流域学習会)
- ⑥ 『山に木を植えました』図書ワークショップ

公益事業Ⅲ 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業

調査事業では、源流地域の環境の実態把握と周知をねらいとして、流域をはじめ都市部の人々に協力を呼び掛けた参加型の調査も実施した。また各種専門家による調査や視察が行われた。

【吉野川紀の川しらべ隊】

川上村内のほか、吉野町など流域市町村をフィールドに視察会を実施。



8/23 川上村蜻蛉の滝周辺



8/16 吉野町吉野山

【専門家や研究者による調査・視察】



アメリカ・イギリスの会調査協力 (10/28~30)



「水源地の森」下層植生調査

公益事業Ⅳ 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業

【「森と水の漂流館」の管理】

館の維持管理、案内や企画展・歳時展示などを実施。



冬虫夏草アート展 (11/1～1/11)



端午の節句「吉野杉かぶと」(4/19～6/5)

【「吉野川源流－水源地の森」・「水源地の森交流施設」の管理】

森林内の散策路及び付帯する休憩施設・管理棟の定期見回り・点検、林内散策路の補修を実施。



「水源地の森」管理作業 (左：散策道整備作業 右：木橋復旧作業)



(休憩小屋の経年劣化に対する大規模な補修を川上村役場にて実施。8月)

収益事業（受託事業）

【和歌山市民の森づくり体験学習業務】

和歌山大学視光学部の地域インターンシップ (LIP) としても取組まれ、多くの若者が参加。



【水のつながりプロジェクト実施等に関する業務】

大和平野土地改良区の農家作業の体験を通じて、源流部と平野部の小学生の交流事業の運営を受託。



田植え体験（左：6/14）と稲刈り体験（右：10/18）（橿原市城殿町）



源流体験（川上村西河 9/13）

【啓発用間伐材割箸セット製作】

森林環境保全促進和歌山市議会議員連盟からの受託により、間伐材の利用促進の啓発 PR に利用するための吉野杉の割箸セットの企画・提案を行い、2,500セット10,000膳納品。



【水源地の森守募金】

年度内で 166,590 円をお預かりし、奈良県と和歌山県紀の川流域の小学校 4 年生を対象に下敷き教材無償配布（18,283 部配布）。



パブリシティ（新聞ほか掲載記事）

水源地の森 川上村 水人の共生

1

紀伊山地を西へ流れ、和歌山

で紀伊水道に注ぐ吉野川は、海に流れ込むまで全長136キロ。流域以外の県北部などを含む広域に、広く水の恵みをもたらしている。その吉野川の水が生まれる村、川上村にある「水源地の森」と名付けられた天然林は、たぐさんの命を守っている森だ。

水源地の森がある三之公地区は三重県境に接し、村の中心部からバスで約1時間。吉野林業の代名詞、まっすべな吉野杉が規則的に立ち並ぶ人工林を抜けると、水源地の森が始まる。

幹は太く、樹高が30〜40メートルの高木や中低木が、岩の間を縫いながら流れる溪流の上に、トンネルを作るように続いている。樹皮の茶色が目立っていた人工林と打って変わって緑は深い。風も涼しく、しっとりとした感じがする。

村が購入、守り続ける天然林

「この森はほぼ手つかずの天然林で、シオンやトチノキが主役です。このように高木の間に中低木が生えている安定した森（極相林）になるには、千年ぐらいかかっているでしょう」と、公益財団法人吉野川紀の川源流物語が運営する「森と水の源流館」（同村官の平）の企画調査班長、木村全邦さん（41）は

能力を超えるような買い物。すごい決断だったと思います」と、栗山忠昭村長（63）はいう。

川上村は、水と森を守り活用

「これは30年ほど前、隣接する森でパルプ原料のための木の伐採が始まり、水源地の森にも開発が迫っていたことに理由があった。「林業からすると、天然林は役に立たないものです。10億円という金額は、小さな村の

する「水源地のむらづくり」を目標とした第3次総合計画を平成6年に策定。8年には「川上宣言」を行い、吉野川下流の住民らと手を携え、源流の水と森を守り育てていく決意を示した。

に人が住み、森を見守り、森に心をかけて守る思いが、川につながり、海にもつながります」と話した。

水源地の森に向かう途中、木々がはがれ落ちたように山肌がむき出しになった山が見えた。「村が買わなかったら、水源地の森も丸裸になっていたかもしれない。守られた森がある一方、大変な状態の森もあることを知ってほしい」と木村さんは話す。

今年11月、「ゆたかなる森がはぐくむ 川と海」をテーマにした「第34回全国豊かな海づくり大会（やまご）」が、川上村などを会場に開かれる。水源地の村として「樹と水と人の共生」を目指している同村が進められている森や水をめぐる取り組みを紹介する。（山本岳夫）

「これは30年ほど前、隣接する森でパルプ原料のための木の伐採が始まり、水源地の森にも開発が迫っていたことに理由があった。「林業からすると、天然林は役に立たないものです。10億円という金額は、小さな村の



「このときガイドを務めた木村さんは、学生たちに森の植物や生息している動物を紹介。「田んぼにひいている水も森から来た水。その水は畑も潤し、飼料も栽培してその飼料で家畜を育てるので、牛肉や豚肉、鶏肉も森の恵みです」と森と水、人間との関係を説明した。木村さんはいう。

「環境学習では、川の源流部がわたしたちにとって大切な場所だということを経験してもらっています。多くの方が森を守る意義を認識し、それぞれの立場で森を守ってほしいのです」



「水源地の森」で森と水の大切さについて学ぶ学生ら＝5月、川上村

5月末、この森に大阪国際大（大阪府）の学生14人が訪れた。アップダウンのある片道1時間あまりの森歩きで、学生たちは「しんどい」などと弱音を吐いたものの、清流が淵になった「アマゴプール」で川の水をすくって飲んでみたり、寝転んでは木の葉の重なりから空を見上げたりと、ゆっくりと時間を過ごして楽しんでいた。

次回（24日掲載予定）は、

8月1日は 水の日

特集

「水源地の村づくり」から20年

川上村



川上村
「水を川上げかけるとの言い草が、これからは守らなくてはならない。川上村には、自然の水を飲まざるを得ない。川上村には、自然の水を飲まざるを得ない。川上村には、自然の水を飲まざるを得ない。」



川上村(川上村) 川上村(川上村)

9月に全国源流サミット 「源流再生」へ流域協働

「源流再生」は、水源の保護と水質の向上を図ることを目的として、流域住民と行政が連携して取り組む取り組み。川上村では、この取り組みを通じて、水源の持続可能な利用を実現し、地域活性化を図っている。

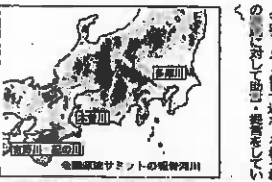
水源地の危機は日本全体の危機!

「水源地の危機は日本全体の危機!」というテーマで、水源地の重要性と危機を訴えている。水源地が汚染されると、飲料水の安全が脅かされ、生態系も壊れる。川上村の水源地を守ることは、日本の未来を守ることに直結している。

川上村からのメッセージ

「川上村の水源地は、私たちの命の水です。自然の水を大切に守り、清潔な水を供給するために、地域住民と行政が協力して取り組んでいます。皆様にも、水源地の大切さを伝えていきたいです。」

あらためて源流の意味を問う



第5回 全国源流サミット

=吉野川・紀の川源流= in 奈良県川上村

開催期間 平成26年 9月5日(金)～7日(日)

1日目 9/5 13:00～17:00 開会式

2日目 9/6 10:00～12:00 全国源流の郷・流域サミット(首長会議)

13:00～17:00 全国源流の郷・流域ミーティング

3日目 9/7 9:00～13:00 川上村エクスカーション

主催:第5回全国源流サミット実行委員会 共催:奈良県川上村、奈良県環境部、国土交通省、国土院、国土院、国土院、国土院

豊かな自然体感

川上でアクアソールシャルフェス 水生生物を観察

川上村の「森と水の源流館」と奈良新聞社は2日、同村西河の蜻蛉の滝近くの音無川で、水生生物の観察会を開き、県内外から約100人が参加した。

トヨタ自動車の小型ハイブリッド車「アクア」の車名にちなみ、海や川の美化を目的に全国展開している環境保全活動「アクアソールシャルフェス2014」の一環。

参加者は網などを持って川に入り、カシカガエルやカワニナ、イモリなど約20種類の魚や昆虫を採集した。

三郷町の小学3年野口麗奈さん(8)と弟武将君(6)は「6匹ぐらいの生き物が捕れました」とにっこり。

省自然公園指導員は「きれいな水にすむ生物ばかり。素晴らしい森林があるから、きれいな水があるんです」と解説し、自然の大切

さを呼び掛けた。

アクアソールシャルフェスは全国の水辺で展開されている参加型行事。県内では「きれいな吉野川を未来に残そう」をテーマに、7月に吉野町で清掃活動もした。



「アクアソールシャルフェス」で観察用の水生生物の採集を楽しむ参加者。白川上村西河のあきつの小野スポーツ公園

第5回全国源流サミット in 奈良県川上村



**再生の方策を
「源流白書」完成**

奈良県 田原川源流
環境部 田原川源流
サミットは、源流の
再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

**19市町村が加入
源流の部会**

平野町 徳島県
川原町 徳島県
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市

**流域が連携
意見交換を**

奈良県 田原川源流
環境部 田原川源流
サミットは、源流の
再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

「水源地の森」購入し保全

川上村は、田原川源流
の再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

流域が連携 意見交換を

奈良県 田原川源流
環境部 田原川源流
サミットは、源流の
再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

**19市町村が加入
源流の部会**

平野町 徳島県
川原町 徳島県
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市

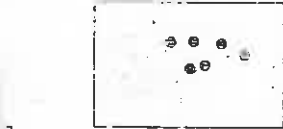
**再生の方策を
「源流白書」完成**

奈良県 田原川源流
環境部 田原川源流
サミットは、源流の
再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

「水源地の森」購入し保全

川上村は、田原川源流
の再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

源流の魅力 役割を発信



**吉野川など流域
交流の話題報告**

吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県
吉野川流域 徳島県

「水源地の森」購入し保全

川上村は、田原川源流
の再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

**流域が連携
意見交換を**

奈良県 田原川源流
環境部 田原川源流
サミットは、源流の
再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

「水源地の森」購入し保全

川上村は、田原川源流
の再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

- 全国源流の部会 加賀市町村
- ① 田原川源流・徳島県徳島市
 - ② 田原川源流・徳島県徳島市
 - ③ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ④ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑤ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑥ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑦ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑧ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑨ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑩ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑪ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑫ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑬ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑭ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑮ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑯ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑰ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑱ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑲ 田原川源流・徳島県徳島市
 - ⑳ 田原川源流・徳島県徳島市

「水源地の森」購入し保全

川上村は、田原川源流
の再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

**流域が連携
意見交換を**

奈良県 田原川源流
環境部 田原川源流
サミットは、源流の
再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

「水源地の森」購入し保全

川上村は、田原川源流
の再生を促進する
再生の方策を
「源流白書」として
まとめた。

河川の環境整備を推進

徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市

ダム完成で下流に効果

徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市

源流サミットによって・メッセージ

徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市

20年の取り組み

徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市
徳島県 徳島市



「流域連携」語り合おう

川上全国源流サミット

河川の源流の魅力を全国に発信する「全国源流サミット」が6日、吉野川源流の川上村で開かれた。川上総合センターに各地の源流にある漁協や自治体の職員ら500人が集まり、多摩川（源流・山梨県）や木曾川（長野県）、吉野川の3河川での流域連携について語りあった。

今年が5回目。県内からは黒滝村や天川村など6町村が参加した。協議会長の船木直美・山梨県小菅村長が「流域の未来に明るい希望が見いだされるよう源流基本法の制定を目指したい」とあいさつした。

パネル討論では、3河川の源流や流域の漁協と行政の担当者が、流域連携の成果や課題を語り合った。

「夏休みに下流の都市部

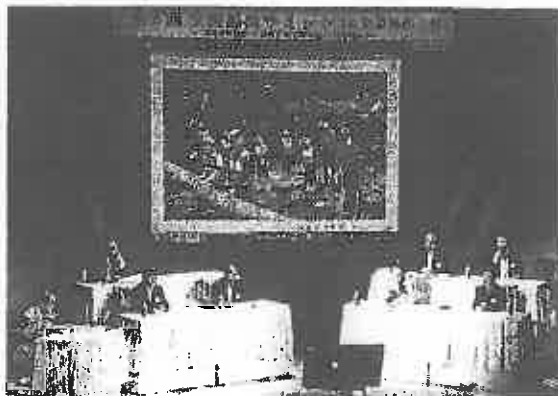
の子どもが源流にやって来て交流を深めている」（多摩川源流の小菅村）▽「源流の村が下流の名古屋市に出張所を開き、名古屋からも大学生が村の祭りに参加している」（木曾川源流の長野県木柵村）▽「河口に近い漁協の漁師たちが川沿いの山に木を植えている」（吉野川下流、紀の川流域の和歌山市）といった連携の取り組みが紹介された。

（菱山田）

源流地域の未来探る

川上で 保全や交流報告

パネルトークなどで流域交流の重要性を再認識した第5回源流サミット＝6日、川上村道の村総合センターやまぶきホール



全国19市町村が参加 物産展も盛況

全国各地の河川の
最上流部に位置する
自治体が参加する
「第5回源流サミット」が6日、川上村道の村総合センターであり、環境保全の
取り組みや地域の未
来を語り合うパネル
トークなどが行われ
た。

【全国源流の協働議
会】をめぐり、環境提
案を行っている19
市町村の代表や一般市
民ら約500人が参加
した。県内は川上村を
入札会場とし、野添のぞ
が協賛を加盟してい

る。
県内でのサミット開
催は初めて。源流地域
は人口減少が大きな懸
念で、協議は「源流
危機は国土の危機」と
位置付けて活動。サミ
ット実行委員長の栗山
忠昭・川上村長は「国

とを築くために山形
の呼びかけを再認識す
る。サミットは、山形
を会場とし、協議会
の松木直典・山形県小
浜村長は「源流地域を
めぐる世代を超えた
交流活動や環境教育な

パネルトークでは、
吉野川（上流の川）
の呼びかけの原が、山梨
県小淵村が自治体間
交流のきっかけ（2008
年）を語り、長野県小淵村が
「源流」の源流
（2009年）の源流
交流活動や環境教育な

とを築くという団体
が発表した。
東野興志等との
連携が、小淵村では
学生らが地元おりに田
んぼを管理、地元の字
いもなどで田植えを
行った。木村村長は
古瀬川に環境教育を

し、特産販売など
成功した。
二ツの河川は、下
流の市民活動も活発
で、東野興志市長は
中野が源流、河川で
源流（2009年）を
体験も、岐阜県司原市
の市川ルンには木曾
川上流を源とし、味
噌（みそ）作りなどを
続けている。木曾川流
域（みん・みんの会）の
福良夫事務局長は「川
は命のつながり」と話
した。

「全国源流の協働議
会」には各自治体の新鮮な
野菜やフルーツ、人気
の加工品・特産品が
並び、来場者が買い
合わせて行われた

西野川流域は、川上
村の木材業増進委員
と和歌山県紀の川市の
磯崎、和歌山市のシラ
ス湖がつながりを紹
介した。

【コメント】
は、企業活動として森
林整備に取り組み飲料
食品製造販売大手サン
トリホールディング
ス（東京都）の山田健
・エコ戦略部チーフス
ベチャリストらも加わ
り、企業も若者を取り
込む活動の有効性を指
指、人口減少や雇用な
る。

47CLUBは、全国の地元企業が
開業し、買って、食べて、飲んで、
これらを通じて、地元経済を活性化
させることを目的としたサービスです。

47CLUB 出店者募集
http://www.47club.jp

47CLUBは、全国の地元企業が
開業し、買って、食べて、飲んで、
これらを通じて、地元経済を活性化
させることを目的としたサービスです。

47CLUB 出店者募集
http://www.47club.jp

47CLUBは、全国の地元企業が
開業し、買って、食べて、飲んで、
これらを通じて、地元経済を活性化
させることを目的としたサービスです。

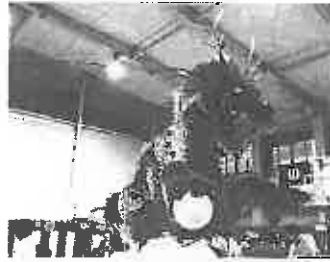
47CLUB 出店者募集
http://www.47club.jp

第5回全国源流サミット in 奈良県川上村 プログラム

【第1日目】開催地視察

【第2日目】全国源流の郷協議会サミット（首長会議）！全国の郷・流域ミーティング
全国源流のつどい

【第3日目】川上村エクスカージョン



【交流会】山の達人辻谷達雄さんが杉の葉を使って作られた龍がお出迎え



【第1日目】吉野川（紀の川）の源流の「水源地の森」を視察する関係者



【第3日目】エクスカージョンでは水源地の森や吉野林業を訪ね、さまざまな問題について考えた



【物産展】「全国源流の郷協議会」の加盟市町村以外に、吉野川紀の川流域協議会も出展



客席中央に設けられたコメントターの席がスクリーンに映し出された

流域が主役となった初のサミット

こうした試みは、それぞれの発言に深みと広がりを持たせ、今まで時間が足りずに物足りなく感じていたパネルディスカッションのイメージ

「全国源流の郷協議会」の6町村が地域の特産品でもてなしを行い、物産展でも吉野川・紀の川流域協議会が参加するなど、川を通じて生まれた「つながり」がさらに広がりをみせたサミットとなった。

を払拭させ、参加者から高い評価を得た。

パネルトークでは、多摩川源流の長野県小菅村の「多摩川源流大学」や下流域の「狛江水辺の楽校」の取り組み、長野県木祖村と名古屋市の交流事業実践の成果、林業、農業、漁業の第一次産業でつながる吉野川紀の川の連携交流事業が報告された。水源地や中下流の環境保全活動や、環境学習としてのフィールドづくり、源流と中下流の交流など、先進的な取り組みが紹介された一方で、「どうすれば若者が農山村で暮らしていけるのか。半分は農村、半分は都会というような関わりができないだろうか」「後継者の育成が進まない」「下流域の人が上流に行くきっかけをどうつくっていくか」などの課題も浮き彫りになった。

また川上村で木材業を行う春増兼さんからは「中下流域で採れるしらすや野菜を川上村で販売したり、流域で川上の木材を使って家を建てるなど、都道府県を超えたつながりを意識してつくるのが川を守り、流域を守り、安全な地域づくりにつながっていく。流域ごとにそういう取り組みができれば」との提言も出た。コメントターの中村文明さん（NPO法人全国源流ネットワーク

代表）は、「流域が主役となるサミットは今回が初で、大変意義深いものであった。『源流白書』（※）もでき、源流を支えて、源流を守っていく仕組みづくりの第一歩が今日のサミットだった」と評価した。

実行委員会の事務局を担当した今福和男さん（川上村役場水源地の村づくり課課長補佐）は、「準備段階ではなかなか形にできず難しかったですが、たくさんの方に助けていただきたら、川上村らしいサミットができたと思います。従来の『源流が大切』というメッセージだけでなく、『流域連携』というキーワードについてもいろんな議論ができたサミットでした」と。また尾上さんも「これまでのサミットではやっていないことを試みることができ、その意図を参加者の方々にも理解いただけたことに喜びを感じました」と振り返る。もちろんファックスの送り主からも「いいサミットだった。ありがとう」との言葉が寄せられたのは言うまでもない。

源流に暮らす人だけでなく、流域の人たちとそれぞれ連携する「流域連携」が今後の鍵になることを認識した今回のサミット。新たな試みは、未来に続く第一歩となった。

（取材・文 西久保智美）

※ 全国源流の郷協議会が2013年3月に発行。源流地域の課題と提言をまとめたもの。



レポート 第5回全国源流サミット

主役は「流域」

開催地・川上村が挑戦した 新しい連携づくり

水の流れの始まりを意味する「源流」。その魅力と役割を再認識するとともに全国に向けて発信する「第5回全国源流サミット」が2014年9月5日～7日、奈良県川上村で開かれ、源流に位置する9県19市町村から約500人が参加した。

このサミットは19市町村でつくる「全国源流の郷協議会」によって各地で開催され、今年で5回目。県内からは黒滝村や天川村など6町村が参加した。サミットの前身である「全国源流シンポジウム」から数えると15回目を迎えた今回は、従来の基調講演を省き、源流や流域で活動する人々によるパネルトークに重点を置いた新たな試みで企画された。

結果、源流や流域の現状や課題、未来について参加者に問いかけ、思いを共有するきっかけとなり、大成

功に終わった。そのサミットを振り返ってみたい。

始まりは1枚のファックス

川上村での開催は、「第3回全国源流シンポジウム」として開催された2002年に続いて2巡目ということもあり、実行委員会ではサミットの在り方を模索していた。今までのシンポジウムやサミットでは、源流に暮らす人や学識経験者によって「源流の貴重さ」「存続の危うさ」などの提言を発信してきたものの、危機的な状況について訴えることに終始されていた感是否めず、そろそろ具現化に向けて、みんなで考える場をつくる重要性を認識していた。前回となる群馬県みなかみ町でのサミット視察後、実行委員会宛に届いた一通のファックスが、その思いに

火をつけた。

それはみなかみ町でのサミットにも参加していた岡山県旭川の源流に暮らす人からの手紙で、15回目となるこの催しに対する変化を期待する激励の内容だった。実行委員会の尾上忠大さん（公益財団法人吉野川紀の川源流物語事務局長）は、「ファックスには驚きましたが、川上村でのサミットに期待されている熱い思いが伝わってきて、奮起するきっかけとなりました」と話す。とりわけメインプログラムの「全国源流の郷・流域ミーティング」では、大胆にも基調講演を省き、一体感のある退屈させない内容と進め方を心がけた。「真の流域連携」とは何か？とにも語り、つなげよう」をテーマに、源流というピンポイントを越えて「流域圏」を意識した構成を企画。



流域をイメージし、上段に源流地域、下段には中下流地域の発表者が座った

首都圏の多摩川、中部地方の木曾川、そして吉野川紀の川の3つの河川の各源流地域と中下流域で活動を行う団体の取り組みを紹介し、流域交流・連携の現状や課題を語る「源流×流域パネルトーク」に2時間30分の時間を割いた。その思いは、「今年は時間もたつぷりと、みなさんにしゃべっていただきます」とのサブテーマにも表現されていた。

もちろん舞台にも流域をイメージし、上段には源流地域を、下段には中下流地域の発表者が座り、コメントーターは客席中央に席が設けられ、会場全体が一体感を感じるように工夫がされていた。またサミット後に行われた交流会では奈良県内の



県内で初めて見つかった絶滅危惧Ⅱ類のカサゴケモドキ
モドキ 29日 川上村高原

絶滅危惧Ⅱ類「カサゴケモドキ」

川上に群落

本州南限

県内で初確認

川上村高原地区で、環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類のコケ、カサゴケモドキ(ハリカサゴケ科)が見つかり、同村の環境学習施設「森と水の源流館」が29日発表した。県内では初めてで、本州の南

限になるといふ。

地表をほうき葎の先端に長さ約1センチの葉約20〜50枚が放射状に付き、雨が降ると傘のよう

に開く。

調査班長(41)が県レッドデータブック改訂に伴う調査中に、集落内の土手で群落を見つけた。標高約570メートル。高原性気候や地域住民による定期的な草刈り

によって生育環境が守られたという。常緑の美しいコケで、これまで本州の南限は滋賀県南部とされていた。オオカサゴケより小さく、カサゴケより葉の枚数が多い。北半球に生育する北方系の種で、地球が寒冷化していた約2万年前に日本に入ってきて生き残ったと考えられ、資料などを展示する。

環境守った地域の草刈り

カサゴケモドキ川上で見つかる

絶滅危惧の植物

県内では未確認で、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されているコケ植物「カサゴケモドキ」が川上村で発見された。



村の環境学習施設「森と水の源流館」職員で日本植物学会会員の木村全邦さん(41)が29日、発表した。

カサゴケモドキはスギコケの仲間。傘が開いたように見えることから、この名が付いたという。

県版レッドデータブック改訂委員の木村さんが今年3月中旬、改訂調査の一環として高原地区に生育している希少な植物を探していたところ、畑の土手で発見

した。木村さんは「発見地点の標高が570メートル、生育にはとても気候がぴったりとみられる」と話す。11月1日から来年1月11日に源流館である「冬虫夏草アート展」で写真と標本を展示する。問い合わせは源流館(0746・52・0888)へ。(養山出)

14.9.30 朝日新聞

河

2530

資料を展示へ

鹿角抄

吉野川の源流域に位置し、清流と豊かな天然林が残っている川上村で、コケの一種、カサゴケモドキが生育していることが確認された。

カサゴケモドキは、環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類になっている貴重な植物で、県内で確認されたのはこれが初めて。紀伊半島でも他に例はなく、本州では川上村が南限になるといふ。

発見した森と水の源流館（川上村）企画調査班長、木村全邦さんに、カサゴケモドキを見つけた同村高原地区に連れて行ってもらい、生育していた場所の意外さに驚いた。

珍しい貴重な植物なので、誰もいかないような山奥にひっそりあるのかと思っていたのだが、高原地区の集落内。当然、すぐそばに民家があり、村の人が畑を耕していた。

カサゴケモドキは、茎の先端に約20枚から50枚の細い葉が、傘が広がるように広がっていて、葉の長さは1

貴重なコケ守った集落の暮らし

程度。地面にへばりつくように生えているので、よく注意してみないとわからないほど。

なぜ、こんな集落の真ん中の人が生息しているすくそばで、絶滅が危惧されるようなコケが生きていたのか。木村さんは「ここでは人と自然のかかわりが深く、うまくつきあいができているからです」と説明した。

カサゴケモドキがあったのは、狭い坂道脇の斜面地だったが、この地区では集落内を定期的に草刈りしているそう。集落の人たちがきちんと草刈りをする事によって、丈の高い雑草が生い茂ることなく、カサゴケモドキにうまく具合に日が当たり、絶滅せずに生き続けたというのだ。

カサゴケモドキに、木村さんがスプレーで水をかけると、葉が透明感のあるあざやかな緑色にかわり、生き返ったように傘が開いた。

この集落の人たちが自然の中で代々続けてきたきちんとした暮らしが、小さくこんなに美しい植物の絶滅を防いだのだ。（山本岳夫）

奈良公園などで 野草調査会

来月に森と水の源流館

川上村の森と水の源流館は、9月9、16、23日に、県内3カ所で野草調査会「吉野川紀の川しらべ隊・野草をしらべよう」を行う。

調査地は奈良公園（9日）、吉野山（16日）、川上村・蜻蛉の滝周辺（23日）の各所。専門家らが指導。3回参加すると、街、里、森の自然環境の違いを比較できる。1回だけの

参加も可。いずれの回も現地近くで集合、解散する。

対象は小学生以上（小学生は保護者同伴）。参加費は1人1回500円。各回定員20人。申し込み、問い合わせは同館、電話0746（52）08888。

訂正 2日付10面の「野草調査会」の記事中、「9月9、16、23日に、県内3カ所」とあるのは、「8月9、16、23日に、県内3カ所」との誤りでした。

16日 大淀・川上で「全国海づくり大会」

水源地に 人々の知恵

「第34回全国豊かな海づくり大会」が16日、大淀町と川上村で開かれる。テーマは「ゆたかなる 森がはぐくむ 川と海」。ただ、海がない県で暮らしている。具体的なイメージを抱きにくく、そんな思いを抱えながら、吉野川の源流の村を訪ねた。

吉野川源流を訪ねて

奈良市内から車で2時間。川上村の三ノ公と呼ばれる地区に、その森はある。「3人の公家」の意味で、室町時代の南北朝統一後、北朝に対抗する勢力が「後南朝」の拠点を構えたと伝えられる。村では今も、皇子をしのぶ儀式が営まれる。集落から人影が失せて久しい。道すがら、木村金太郎さん(81)が、そんな歴史を教えてくれた。水源地の森を管理する「森と水の源流館」の職員。「コケ類の専門家で、県内外で生態系の調査を手がける。」

森の手前、小さな谷間に山の神様がまつられていた。原則、森に立ち入ることはできない。辺りには甘い香りが漂う。ウコキ科のタカノツメの落ち葉が発酵して放つものだとした。

国内有数の多雨地帯、大台ヶ原のふもと。こけむした岩の間を、しぶきを上げて水がかけ下りる。岩を突き破りそびえる巨樹。細のよなな森。足もこには、ひびきやほの若い木、何千年も続く自然の営みがある。澄んだ沢に、魚の姿はない。「きれいな水、冷たすぎる、流れが速すぎるから」と木村さん。生まれたての水に木々の葉が落ちて腐り、やがて土から養分がしみ出て生き物のすみ場所ができる。「豊かな海のために森が大切」と言われ、各地で漁師が植林活動をしているのは、このためだ。

ここで確認された草木、シダ類は約700種、コケ類は約300種に上る。

林業の盛んな川上村に、今も



村が買い取り保全している「水源地の森」川上村

巨樹・澄んだ沢…海育む森

全国豊かな海づくり大会 海や川の環境保全、漁業振興などを目指し1981年から毎年開かれていた。海のない所ではこれまで滋賀、岐阜県で開催された。天皇皇后両陛下が出席し、16日午前到大淀町文化会館で式典がある。その後、川上村のおおたき神社に移動し、アマゴとアユを放流する。招待された人しか参加できない。

手つかずの森が残る。一見不思議だが、そのわけは、全国に先駆けて室町時代から植林を始めた。林業をするエリアを限ったことだという。

結果、全国でも珍しい原生林となったが、1980年代には製紙会社が盛んに伐採した。土砂が川に流れ込むようになり、村が保全することに。約10億円をかけて、阪神甲子園球場約190個分の740haを買収、「水源地の森」と名付けた。

山と生きた人々の知恵が宿る財産が残った。そのありようを

目の当たりにし、海がない奈良で開催する意義が、ようやく腑に落ちた。(栗田隆彦)

さかなクン・笑い飯ら催し

あす、あさって 福原・五條

15、16日、誰でも参加できる関連の催し「やまと海づくりフェスタ」が福原市と五條市で開催される。

福原市常盤町のまほろばキッズでは15日、さかなクンのお魚教室(午前11時半、午後2時)、ゆるキャラのステージ(午後16日、「笑い飯」のトーク(午

前11時)など。五條市の大川橋下流の河川敷では16日、アユの放流(午後)、さかなクンのお魚教室(午前11時半、午後1時10分)など。式典会場からのライブ中継、金魚すくい体験や特産品の販売も両会場である。問い合わせは事務局(0742・27・8924)へ。

15日	午後1時半～5時	福原市、明日香村方面
16日	午前9時半～11時、午後4～5時	福原市、大淀町方面
	午前11時～午後4時	大淀町、吉野町、川上村方面
17日	午前10時～午後2時	福原市、淡井市、天理市方面
	午後2時～4時半	天理市、奈良市方面 ※時間は目安



水源に近い川

会場案内

川上村

放流・歓迎行事

おおたき龍神湖

やまとの国から感謝



放流行事の準備、カワを放流する天皇皇御歴下
り王子の女隊

◆奈良県開催の意義

「奈良県開催の意義」は、川上村の歴史を伝えるだけでなく、近頃の環境問題や自然の大切さを伝えることにもなる。また、川上村の歴史を伝えるだけでなく、近頃の環境問題や自然の大切さを伝えることにもなる。また、川上村の歴史を伝えるだけでなく、近頃の環境問題や自然の大切さを伝えることにもなる。

地元からメッセージ

水源地の大切さ発信

吉野川の源流をめぐり、水源地の大切さを発信する。川上村、平成14年に開設した水源地の大切さを発信する。川上村、平成14年に開設した水源地の大切さを発信する。川上村、平成14年に開設した水源地の大切さを発信する。

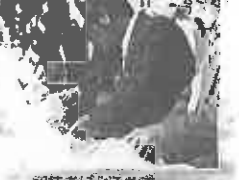
森と水の源流館



「森と水の源流館」完成式典の様子



龍神湖、おおたき川、川上村、川上村、川上村



招待舟にのる放流

ここを築く

株式会社 森下組

代表取締役社長 森下 秀城

本社 〒638-0812 奈良県吉野郡大淀町椋垣本1589
TEL 0747-52-3535 FAX 0747-54-2200

権原営業所 〒634-0063 奈良県権原市久米町673-1
TEL 0744-27-7741 FAX 0744-28-5277

<http://www.morishitagumi.com>

ISO9001
ISO14001
認証取得

天皇皇后両陛下御幸奉迎

祝 第3回全国豊かな海づくり大会「やまを」開催

川でつらなる思いをつなぐ

森から海へ。海から森へ。

森と水の源流館

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

<http://www.genryuikan.or.jp>

〒638-3563 奈良県吉野郡川上村道593-2(2号館前)
電話 0746-52-0888 FAX 0746-52-0388

白菜の秘密に迫る

川上村で「野菜セミナー」

【22】のセミナー「ムリエ宮坂敏史さん 日かぎりの白菜大学」



白菜について学んだ野菜ソムリエのセミナー
24日、川上村迫の村総合センター

が24日、川上村迫の村総合センターであり、村内で家庭菜園を楽しむ主婦らが、白菜のうまさの秘密に迫った。村立図書館と、森と水の源流館の合同企画で初の野菜セミナー。村内外から27人が参加

食べ比べでは、新しいムラサキ色の白菜や村内で育てられた白菜、スーパーで売られている白菜など8種類を生や蒸して試食。参加者は「甘い」「食感も全然違う」と驚きの声を上げていた。より味わいを引き出すおいしい食べ方も学び、宮坂さんは「川上村のきれいな水や空気で育った野菜は、やはりうまい。食べ比べて実感し、自信を持って作ってほしい」と願っていた。

'15.1.25 読売新聞



白菜8種類 食感違うね

川上で市民大学

冬野菜として親しまれている白菜について学んだ白菜大学が24日、川上村迫の川上総合センターであり、野菜ソムリエの宮坂敏史さん(22)が参加者に料理法などを指導した。村教委などが企画し、村内外から27人が参加。宮坂さんの講義で、16、18世紀の中国で現在のように品種改良され、約100年前から日本でも本格的に食べ始められた白菜の歴史などを学んだ。その後は、村内外から集められた8種類の白菜の食べ比べや、加熱したものと火を通さない生との食感の違いなどについて教えを受けた。

参加した同村内の主婦(51)は「白菜の種類が多さに驚きました。味や食感も違っていても参考にになりました」と喜んでいました。



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平

電話 0746-52-0888 FAX0746-52-0388

<http://www.genryuu.or.jp> e-mail: morimizu@genryuu.or.jp